

| | |
|----------|--|
| 氏名 | 大山英樹 |
| 学位(専攻分野) | 博士(学術) |
| 学位記番号 | 博総学甲第1号 |
| 学位授与の日付 | 2017年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当 |
| 学位論文題目 | 夏目漱石と帝国大学 ——「漱石神話」の生成と発展のメカニズム |
| 論文審査委員 | 主査教授 宮澤淳一 副査教授 堀内正博 副査特任教授 小林康夫 副査教授 片山宏行 副査 日本大学法学部教授 諸坂成利 |

論文の内容の要旨

大山英樹

本論文では日本の近代作家夏目漱石(一八六七—一九一六)をとり上げ、この人物がなぜ日本近代文学を代表する文豪と認識されるに至ったか、その過程を検証するものである。その際、所謂「漱石神話」についても言及し、この神話の生成と発展のメカニズムを解明することで、漱石評価が変遷した理由を究明する。

本論文は導入部となる序章と全三部で構成される本論部(全八章)、そして結論部となる終章から構成される。以下、本論部全三部全八章それぞれの要旨を記述する。

第一部「漱石の文壇登場とその認知のされ方」

第一部では、職業作家となる以前の英国留学時代に始まり、大学講師を続ける傍らで『ホト、ギス』を中心に活躍する漱石の兼業作家の時代を扱った。

第一章では、英国留学時代の漱石の「神経衰弱」発症の逸話について考察した。す

ると、この逸話は案外と信憑性に乏しく、根拠の過半は、実は漱石自身の証言に拠ることが再認識された。そして、その漱石の証言自体も、時期によって内容に揺れがあり、その病が持つ意味が変容する。ある時期にはその狂気が自身を作家に誘ったと語り、ある時期ではその狂気の克服こそが、自身に成長をもたらしたと述懐する。あるいはその両方が真実である可能性も考えられる。だがそれでは結局はものは言いようということになってしまい、その人の過去の意味付けは、現在の心境に左右されることの好例を示すものでしかなくなってしまう。漱石の「神経衰弱」体験はそのような曖昧さを持つものであり、この経験が彼を作家としたと安易に結び付けるのは、彼自身が仕組んだ「神話」に無意識に信任してしまっているのではないか。それよりも、留学中及び留学後に書いた「倫敦消息」と「自転車日記」の二作による創作体験こそが、作家漱石の直接的誕生に大きく寄与したものとして改めて注目する必要があることを提起した。

第二章では、漱石初期の作品発表の舞台となる雑誌『ホト、ギス』の性格について主に検討を加えた。この雑誌は正岡子規の作った俳諧誌であり、漱石の初期作品にもその影響が現れている。だがそれにも拘らず、この雑誌は漱石の登場で俳諧誌から小説も載せる文芸総合誌に雑誌の性格を変え、それ以降に伊藤左千夫や野上弥生子などの作家を生み出すことになる。漱石の登場が雑誌の性格を変容させてしまったのだ。だがそれでも初期の漱石を語る際、俳諧出身であることを切り離すことは当時の文壇の人々には難しかった。彼は俳諧を背景に持つからこそ独特な小説を書けるのだと見なされ、彼の作品の中でとりわけ『草枕』は、その独特な世界観が激賞された。そのように漱石がやや特殊な作家と見なされた要因に、俳諧があることを見出した。

第三章では一九〇六（明治三九）年の文壇に焦点を当てた。このとき漱石は、国木田独步、島崎藤村の二人と並び称せられた。この二人は自然主義を代表する作家だが、彼らの活動と漱石の創作とは無関係であり、漱石と自然主義者が同時に文壇で注目されたことは実は単なる偶然に過ぎない。だがこの偶然が、互いを競争相手として認識させ、両者に対立関係をもたらした。そして自然主義者の側から見ると、世界を余裕のある態度で観照することを説く漱石は、自分たちの考えを否定する存在に映った。だがこうした認識を持つ自然主義者たちの背景には、帝国大学出身の大学講師という恵まれた境遇にいる漱石に対する嫉妬があった。この嫉妬が文学論争にかたちを代え、

文壇における対立軸が発生する。そうした出来事を体験した漱石は、帝国大学出身という自分の属性について深く考えさせられたのではないか。そのため、新聞小説家となって以降の漱石は、帝国大学出身者を主人公とする小説ばかりを書くようになる。このような新聞小説家となる直前の漱石の思考の流れを辿った。

第二部 帝国大学出身者だけを描く作家

第二部では、講師を辞職して東京朝日新聞社に入社し、毎年一・二作のほぼ安定したペースで長編連載小説を書き続けた漱石の専業作家の時代を扱った。

第四章では『野分』（一九〇七年）を中心に論じた。漱石がこの作品を書いた頃、漱石は専業作家に転身するか否かの転機を迎えていた。そのため、教師を辞め文筆業で生計を立てるこの作品の主人公白井道也の姿は、漱石自身の将来に対する思考実験でもある。しかし、道也は漱石自身ではない。漱石はその頃に交流を結んだ帝大出身の編集者大町桂月を道也に重ねた。漱石は道也を批判的に観照しながら、文士の生き方の理想像を追究した。そのとき英国の文学者マシュー・アーノルドの思想を想起し、漱石は道也にそれを語らせる。こうした作中人物のモデルに関する新説を提示しながら、漱石自身の価値観を分析することで、この作品が漱石の創作活動の転換点に当たり、そのため漱石の作家史を検討する上で重要な作品であることを指摘した。

第五章では『三四郎』（一九〇八年）について論じた。この作品は帝国大学生の生態を描く小説である。当時の大学生は選抜された存在であり、モラトリウム期間としての「青春」を享受する特権を得た限られた学歴エリート「学歴貴族」であったことを正しく認識する必要がある。そして、その学歴貴族の中でも「文科」と「理科」の学生は、事実上、将来は教職か研究職に限られており、その職種に見合ったストイックな人生観を持つことが要求される。この作品で描かれるのは、主人公小川三四郎がその価値観を内面化していく過程であり、それは人格修養を説く大正教養主義の理念に通じるものでもある。その点でこの作品には、元帝大・一高教師である漱石の教育観が色濃く反映されており、読者層も実は学歴貴族に限られる性質を持つことを見出した。だがそれにも拘らずこの小説は、普遍的な青春恋愛小説として享受することも可能である。恋愛小説としても思想小説としても読めるという、漱石作品が持つ両個性はなぜ生まれるのか、その問いに関しては次章で論じることになる。

第六章では『行人』（一九一二 - 三）を中心とするが、漱石の新聞連載小説全体の性格について論じた。漱石は朝日新聞社入社後、三カ月程度の連載小説を年一回以上掲載するという約定を、かなり忠実に守り続けた。その原則が初めてはつきりと崩れるのが『行人』である。この作品は、漱石の病状悪化で一時休載後、連載再開という経緯を辿る。そして、この休載前と再開後で作品の主題が二郎と嫂直の恋愛から、一郎の内的な苦悩を描くことに変容し、構成の破綻を指摘される「失敗作」であると、論じられることがしばしばある。だが、それは連載小説家として読者にニーズに合わせた路線変更として、むしろ積極的に評価すべきことではないか、というのがこの章で提起したい問いかけである。この作品の前半は、新聞小説の典型である「家庭小説」の性格を色濃く持つ。そして新聞連載小説として、作者も一定の手応えを感じていたはずである。だが、作者漱石の元に集う帝大所属の哲学青年たちは、漱石により思想性のある小説を書くことを求め、漱石がそれに応じたことがこの作品の路線変更の要因ではないか。新聞小説は始めから構成が厳密に固められているわけではなく、読者の反響を見ながら修整が加えられていくものである。漱石はそれを当然と考え、読者の期待に忠実に応えようとするプロ意識の高い職業作家であったと、本章における検証結果から結論付けた。

第三部「漱石死後の神話生成」

第三部は、彼の死後に彼がいかに偉大であり、多大な功績をなしたかが語り継がれ伝承されていく漱石神話の生成時代を扱った。

第七章では、漱石死後の漱石評価について論じた。その死後、彼の弟子達を中心に様々な言説が入り乱れた。その中で批判の対象に挙がるが多かった小宮豊隆だが、まとまりを欠く漱石門下の中で『漱石全集』刊行の中心的役割を果たし、文壇や大衆の漱石への関心をつないだ点で、今日の漱石評価をもたらす上で果たした貢献は大きい。そして漱石やその周辺の人々が持つ教条主義的な性格に対する批判を一手に引き受け、ある意味で漱石に対する役割も果たした。小宮の漱石論は江藤淳によって激しく攻撃されるが、その攻撃はあくまで小宮に向けられたもので、漱石に向けたものではない。江藤はむしろ漱石の偉大さを絶賛しており、その後も江藤論が批判されることはあっても、漱石自身は批判の対象とはならない構造が用意される。漱石が皆から神聖視されるという小宮の目論見はある意味で完全に成功しており、小宮の漱石作品の

読解を浅いと批判するならば、論者は漱石作品のより深い読みを提示する必要に迫られることになる。そのようにして漱石研究が活性化するシステムが、文学研究者たちに構築されたことを見出した。

第八章では本論文のここまでの成果を踏まえ、漱石が知識人として他の作家と切り離され特別視されていく過程と、文学研究の対象としてよく取り上げられる理由について考察した。漱石の作品のほとんどに帝国大学出身者が登場する。だがそれが登場しない『坊っちゃん』と『抗夫』も、実は知識人の内面が描かれる。結局、漱石自身が知識人である以上、そうした人物像以外は描けなかったと考えられ、知識人の生活とその内面だけを描き続けたその特殊性が、戦後に伊藤整らに改めて注目される。漱石が日本において特殊な作家と見なされた理由は、戦前の日本の主流を自然主義系統と見なすためであり、それらに対する批判と漱石の称揚は相対関係にある。この特殊な作家の一群に含まれるのは漱石だけではないが、その中で大衆からも安定した支持を受けたのは漱石一人である。

その要因は、漱石が読者受けを意識した作家であり、ひとつひとつの作品が独立して完結しており、研究論文の対象として扱いやすいためである。一九六〇年代以降、文学研究の場では「作品論」が流行するが、その対象として漱石の作品は積極的に取り上げられ、結果的に漱石論が突出して多い。研究の場での漱石の流行の要因はその対象として取り上げやすさによるものであり、その流行がさらなる議論を促していく。選抜を経た後に起きたこの漱石への集中現象は、流行現象を検証した際に広く見られることであり、漱石そのものに対する評価からは離れたものである。しかしだからこそ、「偉大な作家」として記号化した漱石の価値は益々高められていくのである。

この現象を呼び込むことで、漱石が現在の特権的な地位が形成されたことを、多角的な検証を行うことによって、そのメカニズムの構造を解明することができたことが、本論文における研究の成果と考える。

審査の結果の要旨

1. 問題設定

本論文は、作家の夏目漱石（1867-1916）をとり上げ、「この人物がなぜ日本近代文学を代表する文豪と認識されるに至ったか、その過程を検証するもの」（大山）である。

没後百年を迎えたこの作家は、確かに今なお作品が売れ続け、関連する話題がニュースとなり、一定の敬意のもとに扱われている。しかし、この「文豪＝漱石」の威名がいつ確立し、なぜ今日まで継続されているのかという疑問は実は放置され、学術的に解明されていない。

確かに漱石の死後、彼とその作品に関する著作や各種の研究は膨大なものがこれまで蓄積されている。しかし、実態としては、それらがこの威名を高めたというよりは、むしろ社会一般での漱石評価の高まりを後追いついて研究が行なわれてきたとみるべきで、これまでの文学研究のみをたどっていても、この疑問には十分に答えられない。大山はそのように考え、漱石の作品研究を扱いつつ、「文壇」と呼ばれる漱石の創作活動の場や、その作品を受容した「読者」についても着目し、漱石の生前から没後の「漱石神話」の形成と変遷を追うこととなった。

2. 構成と概略

本論文は、序章と終章に挟まれた本論全8章から構成され、本論は3部に分けられている。

本論文の問題提起と全体の構成をまとめたのが序章「近代日本文学の象徴『漱石』」である。それに続く、第一部「漱石の文壇登場とその認知のされ方」では、英国留学時代に始まり、帰国後の雑誌『ホト、ギス』を拠点に活動する漱石の「兼業作家」の時代を扱っている。

まず、第一章「英国留学と神経衰弱——漱石神話の起源」では、英国留学時代の漱石の「神経衰弱」発症の逸話を検証し、作家漱石の誕生との関係を検証する。そもそもこの「神経衰弱」(neurasthenia)と呼ばれる病理は、米国の神経学者ジョージ・ピアードが19世紀末に提唱し、日本にも伝えられたものだ。大山は、この「神経衰弱」が、深刻な病理であるというよりは、当時の日本の知識人たちが罹患を好んで口にすようになった「天才の一要素として認識されていた」流行的な「狂気」であったことを指摘する。実際、漱石の神経衰弱説の根拠の大半が本人の発言によるもので(英国での「発狂」の噂も漱石本人が暴露した)、この「狂気」への言及をみずからの作家としてのキャリアの成立と関連づけていた姿勢すらあったことが大山の丹念な調査から明らかになる(むしろ作家漱石の誕生に寄与したと大山が指摘するのは、留学中の作品「倫敦消息」と帰国後の「自転車日記」の2作における失敗を含む創作体験だという)。

第二章「ホト、ギス派の俳人作家」では、漱石初期の発表の場となった雑誌『ホト、ギス』についての知見が整理され、作家漱石の誕生と、漱石が逆に雑誌や他の作家たちに与えた影響に光が当てられる。『ホト、ギス』は1897年に正岡子規（1867-1902）の作った俳諧誌である。それが同人で句作を発表していた漱石の初期の作風にも影響を及ぼしていたこと、彼の初の本格的な小説『吾輩は猫である』（1905年）の連載と成功により、文芸総合誌へと変貌し、伊藤左千夫や野上弥生子などの作家を生み出す場となった経緯を大山はたどる。小説主体だった当時の文壇において、『ホト、ギス』は注目を浴びる雑誌となり、その事実が付随して、漱石は「異端の作家」という評価を受けることとなった。その後続いた『草枕』（1906年）も、自然主義的な「普通の小説」とは異なる作品だと理解された（「非人情」をめぐる今日の多様な解釈は存在しなかった）。大山はこのように異端者としての漱石像を再提示することで、他の作家と違うものを書くという漱石の創作意識が促された事情を捉えている。

ここで大山は視野をズームアウトし、1906年の文壇の状況を確認する。それが第三章「自然主義陣営との偶発的対立」であり、当時漱石とともに並び称せられた国木田独歩（1871-1908）と島崎藤村（1872-1943）を視野に収める。この2名は自然主義の作家であり、「漱石対自然主義」という対立関係があったように今日では考えられている。しかし、大山は、これが当事者間の対立ではなく、文壇での第三者による議論の中で、当事者抜きで形成された構図だったことを指摘する（漱石本人はこの図式の形成に異議を唱えていた）。大山は、リアルタイムの諸誌に掲載された各種の漱石批判の評論を追うことで、漱石が「反自然主義者」のレッテルを貼られて利用されることになったプロセスを描き出す。また、この漱石批判の背景に漱石の帝国大学出身者という学歴に対する嫉妬が文壇にあったこと、その嫉妬をフィードバックされた漱石が、帝国大学卒の人間の社会的特殊性を自覚したことが見えてくる。以降の漱石は、自作に帝国大学出身者を必ず登場させ、その特殊性に基づく問題を必ず描くようになったのである。

1907年、漱石は、教職を捨てて東京朝日新聞社に入社し、毎年1～2作のペースで長篇小説を連載の形で発表し続けた。第二部「帝国大学出身者だけを描く作家」は、『野分』論、『三四郎』論、『行人』論を通して、専業作家となったこれ以降の漱石の創作活動に迫る。

第四章『野分』白井道也の造形——帝大出身の文学者』は、漱石研究ではあまり注目されない中篇小説『野分』（1907年）の主人公の形象をめぐる考察である。漱石

が専業作家への転身を考えていた時期に書かれたこの作品で描かれる主人公、白井道也は、教師を辞めて文筆業で生計を立てる人物である。白井道也を漱石の分身とするのが通説だが、大山は、伝記的事実を精査し、また、作中で白井道也の説く「人格論」を分析することによって、そのモデルが当時の漱石が交流した帝大出身の編集者、大町桂月（1869-1925）であったとの新説を提起する。

つまり、漱石は大町桂月と重ねた白井道也の描出を通して文士のあるべき姿を模索したのだが、大山がさらに追究したのは、白井道也に語らせた「カルチュアール」をめぐる思想である。その源泉が同時代の英国の文学者、マシュー・アーノルド（1822-1888）の思想に求められることや、「教養の愛好者」が社会を退廃から救うというその思想に、進路に悩む漱石自身が共鳴し、影響を受けていたことが推しはかれる。その意味で、『野分』は漱石の「創作活動の転換点」にあたる重要な作品なのである。

第五章「『三四郎』に描かれる学歴貴族の生態」は、題名のとおり、『三四郎』（1908年）を論じたものである。今日では「青春小説」として読まれ続けているこの作品を、大山は発表当時の背景に引き戻し、ピエール・ブルデューのエリート論を援用しながら「帝国大学生の生態系」を描いた作品として論じ直し、漱石の問題意識を呼び戻す。当時の大学生は「青春」というモラトリアムを享受できる少数の学歴エリートであった。この「学歴貴族」である「文科」と「理科」の学生は、教職か研究職という将来が見込まれており、その職種に見合う「ストイックな人生観」が要求される。大山によれば、『三四郎』で描かれるのは、「学歴貴族」の価値観を主人公の小川三四郎が内面化していく過程である。そしてこれは人格修養を説く大正教養主義に通じると大山は指摘し、大正教養主義の代表作である阿部次郎（1883-1959）の『三太郎の日記』（1914年）にそのエコーを聴き取る。『三四郎』に敷かれているのは元帝大講師であった漱石の教育観であり、読者に期待されていたのも、「学歴貴族」に対する理解だった。

では、この『三四郎』が、むしろ青春恋愛小説として受容されていったように、漱石の意図に反して、漱石の作品が幅広い読者層を獲得した理由は何だったのか。その答えの示唆を含めて、大山は、後半生の漱石が主たる発表の場とした「新聞連載小説」というメディアに着目し、第六章「新聞小説家漱石の担うべき役割——書き換えられた『行人』」をまとめた。

漱石は、3カ月程度の連載小説を『朝日新聞』紙上に年1回以上掲載する約束を忠実に守り続けた作家だった。ところがそのペースが初めて崩れたのが『行人』（1912-3年）である。『行人』は病気を理由に半年近い休載期間を経た作品で、休載期間の前

後で構成が破綻し、主題が変わった「失敗作」と評価されることが多い。しかるに大山は、この断絶をむしろ肯定的に受けとめる。連載小説家としての漱石が読者の期待に合わせた路線変更と考えられるからである。『行人』の前半は「家庭小説」という新聞小説の典型であったが、自作の読者に哲学青年が多いことを知った漱石は、彼らの期待に応えるために「思想小説」へと路線変更したのである。そもそも新聞連載小説とは読者の反響に応じて修整が加えられていくのが当時の通念であり、漱石もその考えであったことを大山は突き止め、読者を楽しませることを優先するすぐれた職業作家としての漱石像を本章において提示することに成功している。

かくして生前に一定の人気を獲得した漱石が1916年に没して以降、その偉大さが語り継がれ、「漱石神話」が生成されるには、どのような人が関与し、何が起こったのか。そのプロセスを追ったのが第三部「漱石死後の神話生成」である。

第七章「漱石神話の生成と発展——小宮豊隆『夏目漱石』を中心に」では、「漱石神社の神主」と揶揄された弟子の小宮豊隆（1867-1916）の働きぶりが考察される。1つは、漱石晩年の境地として伝わる「則天去私」という言葉をめぐる働きである。実は漱石本人はこの言葉を自作で使ったことはなく、弟子たちの証言のみが出处であったこと、そして、それを定着させたのが小宮豊隆であったことが確認される。2つ目は、この小宮が、数回の『漱石全集』刊行に編纂等の面で尽力し、その成果である『決定版漱石全集』（1937年）の翌年に、かの評伝『夏目漱石』を著わした事実である。小宮の一連の活動が文壇や大衆の漱石への関心を保持し、漱石評価をもたらす上で果たした貢献は大きい。

こうした活動の中で、小宮豊隆はまさに「漱石神社の神主」の役割を果たした。それは、見方を変えれば、漱石本人や周囲の人々が持っていた教条主義的な側面に対する批判を彼が身代わりとなって一手に引き受けたとも考えられる。

小宮が描き出した漱石は、「則天去私」を目指して創作に励んだ孤高の作家であり、この作家像はその後激しく批判される。1955年に発表された江藤淳（1932-1999）の『夏目漱石』はその代表であるが、攻撃対象はあくまで小宮の漱石論であって、漱石の偉大さを損なう意図はなかった。かくして、現存する漱石論は批判の対象となっても、漱石本人が批判されることはない、という批評の構造が成立したと大山は指摘し、ある意味で、漱石の神格化を目指した小宮の思惑は成功したとも言えると説く。かくして文学研究者や評論家のあいだで「漱石研究」が活性化し続けるシステムが生まれ、「漱石神話」も盤石なものとなったのである。

本論文のここまでの議論を承けて、漱石が他の作家とは別格の知識人としてさらに日本人全般に特別視され、同時に文学研究の好対象となる「メカニズム」を総括したのが第八章「漱石評価の確立期——近代文壇批判から「作品論」の成立まで」である。大山は帝国大学出身者の登場しない漱石作品として『坊っちゃん』（1906年）と『坑夫』（1908年）に言及し、これらの作品であっても、現実には知識人の内面ばかりが描かれていることを看破する。大山いわく、知識人であった漱石には、結局、知識人の生活と内面しか描けなかったのであり、その特殊性が、第二次大戦後に伊藤整（1905-1969）らに改めて注目される。作家としての漱石が特別視されてきた理由は、戦前の日本文学の主流が自然主義だと考えられていたからである。

では、反自然主義に位置するこの特殊な作家は漱石以外にもいたのに、一般国民からも定評を得たのは漱石だけだったのはなぜか。漱石が読者の反応を意識して書いた作家であったことと、個々の作品の独立性が強く、研究対象として扱いやすいことを大山は理由として挙げる。実際、学術的な近代日本文学研究の場において、1960年代以降、「作品論」が次々に生まれたが（三好行雄が方法論の確立者とされる）、漱石の作品は特に多く扱われた。こうした研究での人気は漱石そのものへの評価とは別の現象なのだと大山は強調する。かくして日本の読者・研究者のあいだに「文豪漱石」という特権的な地位が確立されたのである。

終章「書き換えられ続ける漱石」では、本論文の副題どおり「漱石神話」の生成と発展のメカニズムが振り返られ、全章が総括される。

3. 評価

本報告書の冒頭にも掲げたように、大山英樹のこの研究は、夏目漱石が「なぜ日本近代文学を代表する文豪と認識されるに至ったか、その過程を検証するもの」であり、全体を総覧するに、その目的は十分に達成されたと考えられる。

第一部では、「神経衰弱」をめぐる漱石本人の言動や『ホト、ギス』誌との関わりを扱うことで作家漱石の誕生に精緻なピント合わせを行ない、自然主義との「偶発的」対立に漱石を取り巻く環境を描き出す、まさに「図と地」を捉えたバランスの良い考察を進めている。第二部では3つの作品論を展開することで、漱石が直面した「カルチュア」（教養・文化）とエリート主義の問題や、読者との対し方の問題が浮き彫りになる。その結果、「帝国大学出身者だけを描く作家」の立場と悩みが明らかになり、その生前の人気の所在が示唆された。第三部では、弟子の小宮豊隆の存在と役割をク

ローズアップすることで、死後の漱石の神話形成のプロセスを解き明かし、現在の確立した漱石評価の成立までの見取り図を示した。また、この研究には、通説とは異なる事実の提示がよく含まれており、リアルタイムの資料の丹念な調査の結果だとわかり、大山の事実関係の説明に、審査委員一同、教えられることも多かった。

ただし、今後の研究においてさらに探究すべき論点や課題もみえてきた。主なものを挙げるならば——「神話」の形成を漱石本人が仕組んだ可能性すらあるという指摘は重要だが、さらなる傍証が求められ、また他の漱石像の検討もするべきであること（「神話」を形成できなかった森鷗外との比較はどうか、また、「人格主義」のようなレッテルから逃げようとしていたアイロニカルな漱石の姿も追い求めるべきではないか）。作品を扱う際に、作品の登場人物のモデル探しに傾斜していること（テキスト論的な手続きにも訴えるべきである）。『三四郎』が青春恋愛小説として読まれるに到った理由が検討されていないこと（作品自体の分析と、読者の受容の変遷のプロセスの究明がさらに必要）。第三部の指摘は重要で新鮮なものばかりだが、第七章で漱石の没後の受容状況を論じる際に、小宮豊隆と江藤淳をキーパーソンとしたためか、彼ら以外の書き手による批評の提示が貧弱であること（批評の時系列上の変化をもっと詳しく追うべきである）。第八章での近代文学研究の成立について、三好行雄を起点と措定していること（三好以前の調査も必要）。——などが挙げられる。

しかし、漱石神話の形成と発展のプロセスをここまで丹念に調べ、考察する作業は高い評価に値する従来にない成果であり、上記の指摘によってそれが損なわれるものではない。

また、本論文が、総合文化政策学研究科においてまとめられたことも意義深い。文学研究をアカデミック・バックグラウンドとしていた大山英樹は、本研究科において、人文科学と社会科学の融合を標榜する研究を深めることが期待された。本研究科で文学的事象を扱う場合、文学作品や作家個人の想念の内部でのみ論じるのではなく、必ず社会との関連を考察に加えなくてはならない。

本論文は、言わば、日本社会における「文豪」という文化的アイコンの生成と変遷のプロセスを解明する試みである。文化的アイコンが社会的な事象であることは自明であり、本論文では、その受容を扱い、社会におけるエリートの問題や、雑誌・文壇・新聞小説といったメディアと創作者とが相互に影響を与え合う動的な関係が精査されている。大山英樹の企ては、表象文化論、メディア論、文化資本論をも含めた、まさに人文科学と社会科学の両方の領域にまたがる研究であり、総合文化政策学研究科

において望ましい成果と考えられる。この成果の誕生を高く評価し、冒頭に記したとおり、全員一致で本論文を、博士（学術）の授与にふさわしいものと判断する。